

3 イチゴのミカンキイロアザミウマを天敵で防除

ねらいと成果

ミカンキイロアザミウマは、兵庫県では1995年に初発が確認された花き、野菜、イチジクなどを加害する防除困難な侵入害虫である。イチゴではふ化幼虫は幼果に留まり、果実表面を食害するために果面が黄化したり、光沢のない褐色になり商品価値を失う。一方、イチゴは生食に供されるために一層安全で安心な生産物が望まれる。また、施設栽培では受粉昆虫を導入しているために天敵類の利用価値が高い。このような背景の下に、天敵の登録に向けた取り組みが進められている。このような観点から、天敵を利用した防除法を確立するために、天敵のミカンキイロアザミウマの捕食量とイチゴにおける放飼効果を検討した。その結果、ククメリスカブリダニでは、株当たり100頭、タイリクヒメハナカメムシでは株当たり1頭をいずれも発生初期に2回放飼すれば密度抑制効果があり、果実被害も生じないことが明らかになった。

内容

1 ナミヒメハナカメムシの捕食量

ナミヒメハナカメムシの1頭1日当たりミカンキイロアザミウマ成虫の捕食虫数は、成虫6.7頭、幼虫2.3頭であった。

2 ククメリスカブリダニの放飼効果

プランター植したイチゴに対するククメリスカブリダニの株当たり100頭放飼は、ほぼ1か月間ミカンキイロアザミウマの密度を抑制した(図1)。施設促成イチゴのミカンキイロアザミウマに対して、発生初期とその3週間後にククメリスカブリダニを株当たり100頭放飼すると、6週間程度密度を抑制し、幼果の被害も発生しなかった。

3 ヒメハナカメムシ類の放飼効果

プランター植したイチゴのミカンキイロアザミウマに対してタイリクヒメハナカメムシを株当たり1頭放飼すると、放飼後12日後から次世代が出現し、

ほぼ1か月間ミカンキイロアザミウマの密度を抑制した(図1)。また、別の試験で、在来のナミヒメハナカメムシは、タイリクヒメハナカメムシとほぼ同等の密度抑制効果があることを確認した。施設イチゴに対してもタイリクヒメハナカメムシを発生初期の4月下旬と5月中旬にいずれも株当たり1頭放飼すれば、密度抑制効果があり(図2)、果実被害の発生が防止できた。

普及上の注意事項

- ①ククメリスカブリダニはイチゴに登録があるが、ヒメハナカメムシ類は今のところ登録がない。
- ②多発生になってからの放飼は、効果が落ちるので発生初期の使用に心掛ける。
- ③天敵放飼前後は、殺虫剤の使用をひかえ、やむを得ない場合には影響の少ない薬剤の散布か、害虫の発生している株へのスポット散布にとどめる。

河野 哲(農業技セ・病虫害防除部)

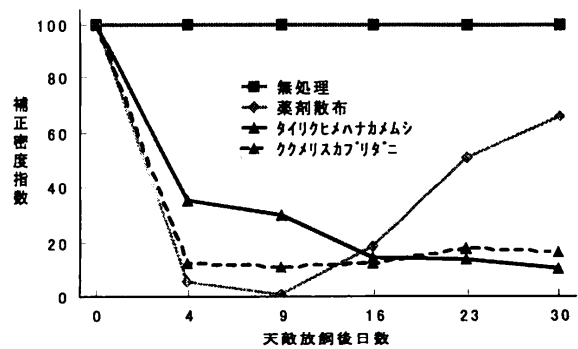


図1 プランター植イチゴのミカンキイロアザミウマに対する天敵の密度抑制効果

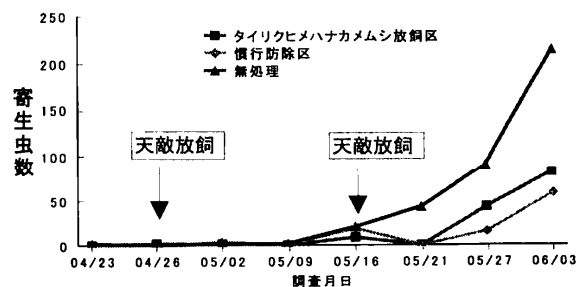


図2 施設イチゴのミカンキイロアザミウマに対するタイリクヒメハナカメムシの放飼効果